

翻刻『大阪御城代勤行』（一）

くすりの道修町資料館

佐藤 敏江

中之島図書館

小笠原 弘之・北川 敏子

中央図書館

上村 厚貴・苗村 昌世

日置 将之・八木 美恵

山田 瑞穂

はじめに

原文書は大阪府立中之島図書館蔵（文書／八）一冊（二十七・五×二十^{cm}）表・裏表紙各二
本文一〇四丁。

本冊は、大坂城代周辺の業務に関わる事務控である。元禄三年（一六九〇）の各種文書が中
心となっているが、末尾には元禄七年（一六九四）の記述もある。元禄四年（一六九一）の年
頭に大坂城代の交代があつたため、引継ぎ資料として前任の事務控を書きし、その後に後任者
が必要事項を加筆したものと考えられる。元禄三年時点の大坂城代は常陸國土浦藩主であつた
松平因幡守信興で、貞享四年（一六八七）十月十三日から元禄三年十二月二十六日まで大坂城
代を務めた。かわって出羽国上山藩主・土岐伊予守頼殷が、元禄四年一月十四日から二十二年
の長きに渡り大坂城代を務めることになる。この任期は、第二代大坂城代・阿部備中守正次と
並び、歴代大坂城代の中で最長の在職期間となつている。土岐伊予守は、本冊中では加番とし
て来坂した際の番代手順を記した部分にも登場するが、これは元禄二年（一六八九）から三年
の一年間、大坂城本丸を警固する山里丸加番として大坂城に勤仕の後、翌年に大坂城代を拝命
したことによるものである。

参考

「徳川大坂城」 大阪城天守閣 二〇〇八年

「大坂加番記録二」 大阪城天守閣 一九九七年

凡例

原本の忠実な翻刻を原則とし、旧漢字はそのまま表記した。

異体字は標準の字体に改めた。但しろ（より）・べ（しめ）はそのままとした。

かなの古体・変体は原則として現行の平かなを使用した。但し、江（え）・与（ヒ）・者（は）・
茂（も）などの慣用字は、原本のままで小字で表記した。

反復記号「ゝ」「ゞ」「〳〵」等は原本の通りに表記した。

判読不能の文字は□で、確定できなかつた文字・誤字・脱字・衍字等は原本のまま翻字し、（カ）
(ママ)等、その旨傍注を付した。

追筆等は本文中に繰り込み、書き損じ等特にその必要を認めない場合は省略した。

『大阪御城代勤行』（一）

大坂御城代勤行

元禄三年七月日

御金銀出立 覚書

紀州江上使
一六月廿九日之御奉書七月五日到来 御銀三千貫目御取寄被遊候儀申来
一両御番頭江御宰領衆之儀 以御奉書申来

御廻状

只今從江戸継飛脚到来 去月廿九日之奉書致拝見候處
公方様益御機嫌好被成御座之旨被仰下 恐懼御同意奉存候 各江奉書壱通參候間為持進之候
此外御用之儀被仰下候得共 不達儀御座候而今日中私宅江御出可被成候 以上

七月五日

米津周防守様

酒井右京亮様

一御番頭御出御帰以後

辰巳両年之御銀下候控写之遂候 宰領衆相極次第可被仰聞候 明後日之次飛脚其段可申上候
以上

七月五日

但此次飛脚御金計之儀三而
御立被成候三而者無空之候

御番頭様

七月六日

御金奉行殿

一御金三千貫目両日二御下可被成由 日限御書付 御番頭江被遣之候
一御番頭江宰領衆一番立 二番立之書付并宿割泊付之書付來
一御金初立 四五日前京都江以宿次
御朱印之儀被仰遣候

京都江之御連狀

去月廿九日之繼飛脚到来 奉書致拝見候處

公方様益御機嫌能被成御座 恐悦御同意奉存候 將又爰許御藏之白銀就御用 三千貫目大御番

衆之内 為宰領江戸江可差下之由 從御老中被仰越候間 来ル十六日 十九日兩度 當地
出之可遣候 傳馬并宰領衆四人別紙ニ書付進之候

御朱印式通御越可被成候 依之宿次を以申達候 恐惶謹言

七月九日

四人

内藤大和守様 人ニ御中

覚

午七月十六日大坂立

銀千五百貫目

此傳馬數五拾四疋

内四疋者宰領兩人ニ被下之

宰領

午七月十九日大坂立

銀千五百貫目

此傳馬數五拾四疋

内四疋者宰領兩人ニ被下之

宰領

以上

七月九日

此狀箱壹 従大坂京都迄 如例宿次三急令持參 内藤大和守殿江可相届者也

午七月九日

土佐

主殿

摂津

因幡

右宿ニ年寄

今度差下候白銀馬數 御金奉行衆ニ書付被差出候間 内藤大和守殿江

御朱印之儀申遣候 連狀并傳馬數之書付相調 宿次證文差添廻申候 御判形被成 土佐守殿三而
御認 明朝御出し可被成候 已上

七月八日

安部摂津守様

遠山主殿頭様

小田切土佐守様

内藤大和守殿江遣候状箱 為持進之候 連狀并傳馬數宿次證文者 先刻廻申候而 御認可被遣候

已上

七月八日

小田切土佐守様

御手紙令拝見候 内藤大和守殿より宿次 連状箱壹并箱壹 只今参候付而送状共為持被遣請取
申候連状遂披見 従是廻可申候 送状則令返進候 以上

七月十二日

小田切土佐守様

只今從内藤大和守殿 御朱印式枚參候付而返礼遂披見 此方より遣候 宿次證文も判形消 差添
廻申候 以上

七月十二日

安部摂津守様

遠山主殿頭様

小田切土佐守様

明後十六日立傳馬先觸之證文相調廻申候御判形被成 土佐守殿より明十五日如例御出し可被
候 将又宰領衆江 御朱印相渡可申候間 明晚七ツ時御出合可被成候 以上

七月十四日

右三人様

明後十六日立宰領衆江 御朱印相渡可申候間 明十五日七ツ時過御同道可被成候 傳馬先觸之
證文明朝出之被申候様 小田切土州江申達候 以上

七月十四日

明後十六日次飛脚被遊御立候儀
御直談三被仰達

御番頭様

一宰領衆江御渡被成候御連状者御二人御連判也 十五日七ツ時御寄合 御判相済候付而御番頭衆
江者七ツ時過と被仰遣候御文言者奉書言上之留三有之

明後十六日白銀千五百貫目弥相立可申候 二番立者来ル十九日二而候間 其御心得可有之候 以
上

七月十四日

御金奉行殿

一先觸證文

就御用從大坂江戸江白銀差下候 為宰領大御番天野清右衛門 跡部傳四郎兩人 明十六
日大坂ニ出立候 傳馬五拾四疋支度可仕候
御朱印者宰領衆持參之事候

道中泊之覚

七月十六日 伏見

同十七日 石部

同十八日 関

同十九日 桑名

佐屋廻り

同廿一日 宮

同廿二日 御油

同廿三日 前坂

同廿四日 掛川

同廿五日 藤枝

同廿六日 神原

同廿七日 三嶋

同廿八日 大磯

同廿九日 川崎

右之通宿ニ泊所昼夜三而白銀之番入念可相勤者也

午七月十五日

土佐

主殿

摨津

因幡

右宿之年寄

一御金宰領衆 御朱印御頂戴以後追付為御礼御出 依之御口上書相調 大御番所御番頭江相渡置

翌朝御門御通候節 出向御口上申上候

口上

此度為御宰領御下候付 御朱印御頂戴難有思召之旨尤存候 依之昨晚者御出被仰置候
趣承届 入御念儀共存候 今日者天氣也好御發足珍重存候 右之段申上候様ニ申付置候
由可申候

此御口上書者前日御門しめに被罷越候 御目付へ相渡ス

一翌朝御立候節 為御暇乞御出候付而追掛使者を以御口上被仰遣

今日者天氣も好 御出立珍重存候 依之為御暇乞 只今と御出被仰置候趣 承届入御念儀

共存候 被仰置 早と御通候故 不掛御目候付而以丈と申達候

一次飛脚十九日御立之儀著前方三御約束有之候

明後十九日御金銀之傳馬先觸御證文相調廻之申候 御判形被成 土佐守殿より明十八日如例御出しき被成候 将又宰領衆江 御朱印相渡可申候間 明晚七ツ時前御出合可被成候 以上

七月十七日

安部摂津守様

遠山主殿頭様

小田切土佐守様

一宰領衆持参候御連状文言奉書言上之留ニ有之

明後十九日立之宰領衆江 御朱印相渡可申候間 明十八日七ツ時過御同道可被成候 傳馬先觸之證文者明朝出し被申候様ニと小田切土州江申達候 以上

七月十七日

御番頭様

明後十九日白銀千五百貫目弥相立申候 外ニ新地之地子金壺箱町奉行衆ら差下被申候 是者御朱印傳馬之外 人足三而為持差下申候 為御心得申達候

七月十七日

御金奉行殿

就御用從大坂江戸江白銀差下候 為宰領大御番本間十右衛門 戸田三右衛門両人 明十九日大坂出立候 傳馬五拾四疋支度可仕候

御朱印者宰領衆持參之事候 外ニ御金壺箱差下候間 人足式人是又可致用意候

道中泊之覧

七月十九日 伏見

同廿日 石部

同廿一日 関

同廿二日 桑名

佐屋廻り

同廿三日 宮

同廿四日 御油

同廿五日 前坂

同廿六日 掛川

同廿七日

藤枝

同廿八日

神原

同廿九日

三嶋

八月朔日

大磯

同二日

川崎

右之通宿ニ泊所昼夜二而御金銀之番入念可相勤者也

午七月十八日

土佐

主殿

摠津

因幡

右宿之年寄

十六日十九日兩日 次飛脚相立 御文言者奉書言上之留ニ有之
一内藤大和守様江御再報あなたろ參候 御朱印箱之封印御返し
一大和守様江之御再報者相認 土佐守様ら過書便ニ被遣候事

京都江之御再報

去十二日乍御報御連書致拝見候

公方様益御勇健被成御座 恐悦御同意奉存候 将又今度御用之白銀兩度ニ差下申候付而傳
馬 御朱印之儀申進候處 式枚被遣 槌請取 則宰領衆四人江相渡申候白銀者 十六日 今十
九日相立申候 右之 御朱印於江戸差上候様ニ与申合候 此段為可申述 如此御座候 恐惶
謹言

七月十九日

四人

内藤大和守様

御再報

追啓 御朱印箱之御封印五返進仕候 爰許ろ之送状御返請取申候以上

七月十九日

四人

内藤大和守様

紀州江 上使

一紀州江 上使被 仰出候節 御樽肴之儀以御奉書申來 其節に買物方役人被召寄被 仰渡
候事

一上使伏見到着之節 明何時到着可有之由 先達而御狀到来 是者大形及暮来候付而 御即報無
候事

之但時三可依事

一上使何比御到着可在之儀先達而宿觸之證文當地馬借カ町奉行所江申来候付而土佐守様カ右之様子申來依之御廻状

猶以於到着次飛脚も相立可申候為御心得申達候以上

明廿四日之朝青山信濃守着船之由二付拙者於下屋敷遂對話候間五ツ時前御出可被成候未信濃守方カ者不申越候得共先為御案内申達候信濃守方カ左右次第追而可申達候以上

七月廿三日

安部摂津守様遠山主殿頭様小田切土佐守様

明廿四日之朝青山信濃守着船之由付其外右同断

七月廿二日

御番頭様御加番様

此廻狀前方カ相調置但翌朝被遣候儀も有之

只今青山信濃守方カ飛札到来今七ツ過伏見出船明朝當地可為着岸之由申來候弥拙者下屋敷江明朝五ツ時前御出合可被成候以上

七月廿三日

御定番町御奉行御番頭御加番

此廻狀前方カ相調置但翌朝被遣候儀も有之

紀州江之 上使青山信濃守明廿四日之朝可為着岸之由申越候依之明日繼飛脚相立申候間御狀被遣候者小田切土州迄可被差越候已上

七月廿二日

小濱民部様

此御口上書前方カ相調置

一御到着前御旅宿迄以御使者御口上有之

御口上

今度紀州江之 上使被仰出道中御無事御到着目出度存候昨日者從伏見預御飛札入御令儀共存候及着候付御報不申達候其

弥今朝拙者於下屋敷何茂御參合之事御座節御報二申達候通

候間御勝手次第御出待存候何茂面上可申述候右御口上書前晚カ御使者江相渡御到着前より御旅宿江相詰御着候時分御口上申上候様ニと被仰付候

一紀州江之御樽肴宿次證文下屋敷江御寄合之節出之但證文包紙程付折掛にして上に宿次證文と書之

紀伊中將殿江為上使青山信濃守今日大坂被罷通候御樽肴荷御肴一種被遺之候

間宿次人足拾式人 杖突壺人 無滯出之 宰領次第 和哥山迄可相届者也

午七月十四日

土佐印

主殿印

摠津印

因幡印

大坂カ和哥山迄
宿之年寄

一上使於御下屋敷御參會 御料理出 御立 御旅宿江御帰之跡カ以御使者御口上有之
一言上之御文言留三有之

一御老中カ御傳言 大方御三人江有之候得共 御四人トニ二通認置之
一紀州カ御帰之節 當地御通之時分 御旅宿迄御使者被遣候

一堺御止宿之節 以御使者御首信有之候事

是者御由緒有之付而也 御到着之時分も御旅宿迄以御使者御首信事

一御下屋鋪江御寄合之節 先紀州江之宿次證文并上包之紙相添 御座敷江出候事
一於御下屋敷御參會之節 上使之衆江戸田山城守様 土屋相模守様御傳言 其外御傳言之趣
切紙カ相調御渡被遊候事

以手紙致啓上候 然者青山信濃守殿紀州御仕廻 只今私宅江御出 宿次證文御持參候間為
持進上仕候 以上

七月廿七日

小田切土佐守

松因幡守様

御手紙令拝見候 青山信濃守紀州相仕廻 只今御宅江立寄 宿次證文御持參付而為持被遣
請取申候 各消判之儀 明日廻可申候 以上

七月廿八日

小田切土佐守様

以手紙令啓上候 仍而青山信濃守紀州相仕廻 昨晚土佐守殿迄宿次證文持參付而各為御
消判廻之申候 以上

七月廿九日

安部摠津守様

遠山主殿頭様

小田切土佐守様

土佐守様カ御判御消不被成候趣
付而此時カも御名書加之被遣候

殿様

卯十月十三日御城代被 仰付

一貞享四年卯十二月十三日江戸御發駕三付而 同十日之日付三而 何茂江連状之事

一寒中故尾州熱田ヨリ江府江御届之御状被遣之

一十二月廿二日大津より京都江御立寄夫より伏見江御下り 常之御供廻り之外 村上源太夫 菅谷段
之助 大嶋清二郎御供 右之外者大津より直伏見江被遣之

一廿二日伏見江御到着 廿三日大坂御到着可被成候旨 飛札被遣之

一伏見江從小濱民部様為御迎御船被差越候事

一同所江大坂御在番之御衆より御使者參候事

一御引渡 上使大久保淡路守様 大坂江廿一日之朝御着船之事

一廿三日子ノ后刻 大坂備前嶋江御着船 直御下屋鋪江被遊御越候 翌廿四日朝御着之為御案内
何茂江御使者被遣候事 但船場より御下屋敷迄之道筋江両町奉行所与力 同心為辻固罷在候事

一廿四日御下屋敷江御定番 御町奉行衆 御目付衆 小濱民部様御出 何茂染小袖 麻上下 其以後

御番頭 御加番衆御出

一上使大久保淡路守様御出 廿五日御城入可被成之旨被仰合候事

一廿四日安部摂津守様江御寄合 次飛脚相立候事

但御城代二者御出座無之事

一同廿五日御城入三付而寅ノ下刻 御定番 御目付衆 追手御番所江御出合 太鼓之六打御門之
封印為切御門明候故 上屋敷為請取之 深井茂兵衛麻上下着之 其外役人御城入 其跡より弓鉄
炮長柄者頭 番頭山本菅助御城入 御番所請取之入代相済 御城代御羽織袴三而御手廻計三而御
城入 一之御門迄何茂御出向 夫より御上屋敷江御同道御寄附 上之間三而熨斗出 則御退去之事
一同日太鼓之四打候而 御定番 御番頭 御加番 御目付衆 町奉行衆 小濱民部様 熨斗目上下三而
御出之事 上使淡路守様者摂津守様ニ而被待合 四ツ半時分摂津守様より御時分之御左右有之而
御城代江御出候 其節玄関縁之側迄 御城代御迎ニ御出候事

一上使書院上之間縁側之内 三御着座 中仕切柱より下座 御番頭 御加番衆御着座 床之方ニ御城代
御定番衆 町奉行衆 御目付衆御列座 小濱民部様者此時者御加番衆之次御着座也

一最初熨斗出 其後御料理三汁九菜向詰 看二種吸物 何茂木具曳物 御城代御引被遊候土器取肴
一種出ル 上使御初御城代江被進 則御返シ御盃之臺 町奉行衆御取次有之 其御土器 御定番衆
町奉行衆迄参

一上使江返り御城代御納候 御番頭 御加番衆者不參候 御茶菓子出候而 上使御退出三付而御
城代御式臺迄御送候 何茂惣侍中麻上下着 御勝手江職人共相詰候事

一追手御門者廿八日より出入苦ニ御申合候事
一同廿七日辰ノ中刻 御定番 御番頭 町奉行衆 御目付衆 染小袖麻上下三而御城代江御出 四ツ

時分御城代御同道ニ而御本丸江御越 御番頭者先江被參 桜之御門ニ而被待合 夫迄兩御番所江
御上り御番衆御列座三而熨斗出 それら御本丸御廻り被成候事

一同廿八日御城御用ニ掛り候役人 兩御定番之与力 兩町奉行衆之与力 御城代江參 御城代之役
人与申談候様ニと御申合候事

追手御番所

大御番所 西丸仕切御門 太鼓櫓下御門

大御門下

舛方

張御番所

足輕番所

右七ヶ所御城代迄勤之

張番所上番三人 歩行組外格之内ニ而申付ル

此番人物書候者を差置之

御判鑑差置 御門出入之札見合 何人与讀之 人数ハ足輕見改之 足輕五人 掃除中間

式人

一棒 五本

是者突棒 サスマタ モチリノ脇ニ立掛置之

一突棒 サスマタ モチリ 是ハ御番附ニ而有之

一方迄御使者 御使等張御番所迄參候付為待置 誰様迄与致書付 弁形御番所足輕ニ為持 夫迄
大御番所江遣之 其書付御番頭見候而 上屋敷江遣之 使者は張番所上之間ニ為待置之使役之者
罷出請取之 但先様之御仁躰ニより取次役之者請取申儀も有之候 飛脚ハ状箱張番所ニ而請取
之 足輕ニもたせ 弁形番所江遣之 夫迄大御番所江足輕持參 上屋敷江差越候大御番頭衆 御加
番衆 御目付衆へ方迄御付届も張御番所迄參候而 誰様迄たれ様江之御使者 飛脚と致書付足
軽ニ為持 御小屋江越申候 御家來罷出請取申候 飛脚之状箱ニ而茂此方之者ハ請取不申候 右
之通申通シ仕候迄御座候 物而張番所迄書付差越候儀 又口上ニ而申通し之儀 張番所迄弁形番
所迄傳達 弁形迄大御番所江相達 番頭承届 夫ニ通シ申付候

弁形番所 紿給式人

帳付壱人 足輕五人 掃除中間式人

是ハ大御番所ニ詰居候内ニ而昼之内一時代リ相勤候由 前迄傳達候得共 番人定置相勤之
但方迄參候御判鏡 御門出入之札見合 何人と讀 人數者足輕見改 尤夜中共右之番人此番所
ニ泊ル

一鐵炮 五挺

一棒五本 是ハ鑓掛ニ立掛置之

一突棒 差俟 戻り 水溜井手桶 此分は以前より御番所附ニ而有之

大御門下番所足輕五人 内小頭壱人

此小頭并足輕者 足輕番所三相詰居候内ニ而一時代リニ勤申候 但方ニシテ參候判鏡掛置 御門出入之札見合 何人と讀之 人數者足輕見改ル 夜中ハ足輕壱人宛 此御門下不寢之番相勤ル 半夜代り也

一棒 五本 是ハ足輕並居候間ノニ二置之

足輕番所 足輕小頭壱人
足輕 七人

一数鑓 廿本

一棒 廿本
是ハ足輕並居候後ニ掛置

一棒 廿本
是ハ鑓掛之間ニ立掛置之

一突棒 差俟 戻水溜 手桶

是ハ以前より御番所付ニ而有之

大番所 番頭 壱人

物頭 壱人 面ニ持鑓壱本宛
目付 壱人

給人 五人

帳付 壱人

是ハ御門出入之切手等參候付 帳面ニ記置候
品により上屋敷江書付差越窺之

通シ番 五人

是ハ長柄者ニ勤之

掃除中間二人

一鉄炮 三拾挺 小道真玉箱

一弓 弐拾張 鞠 矢箱

一幕 壱走

一はしこ

一燈灯臺

一水溜并手桶

一屏風 壱雙

一衝立障子 武

此二色者青山因幡守様より被残置候

太鼓櫓下御門 者頭壱人 面と持鑓壱本宛
給人壱人

是八大番所詰居候内三而昼之内一時代り相勤候由前より傳達候得共 右之番人定置相勤之
尤夜中共ニ右兩人此番所ニ泊ル出入之者札之改無之

足輕五人

此内式人ハ番所次之間三人ハ御門之脇番所ニ罷在候

掃除中間式人

一鉄炮 五挺 小道具玉箱
一棒 五本 是ハ鑓掛之脇ニ掛置之

一幕 片走打之

一突棒 差俟 戻水溜 手桶

是ハ前より御番附有之

一同所御門之外平番所中間式人夜中計

是ハ暮六ツ時仕切御門ベ上屋敷江鑑取上ケ置申候 自然夜中用事有之候得者 右之中間大
御番所江申通シ候為三候 但此御門ニ相詰候掃除中間之内を差置候

西丸仕切御番所出入之者札改無之

上番三人中小性申付ル

足輕 五人

掃除中間式人

一鉄炮 五挺

一番鑓 三拾本

一棒 五本 是ハ鑓掛之脇ニ立掛置之

一幕 片走打之

一突棒 差俟 戻水溜 手桶

是者以前より御番所附有之

右七ヶ所番所ニ行燈以前より御番所附ニ而有之 公儀より油渡ル 油渡 南市兵衛

一公儀御役所江御城代之家來立合候 役人何茂給人也 不断白衣ニ而相勤

御破損方役人 式人 下役式人常附

御藏方役人 壱人

小賈物并闕所方役 壱人 下役人壱人

御味噌方役人 壱人 下役人壱人

石役人 壱人

一所ニ番代之次第朝五ツ時當番之者罷出請取九時迄相勤為代 其朝番渡候もの 九ツ時より罷出

江参候と帳面記置 相通之候 御多門不断ハ狭間をもべ錠をおろし 鑑者大御番所ニ差置之 市日之前日掃除申付候

但町人之名書付不来 何月カ毎月如跡シテ 商人市日ニ御多門江罷越候付 兩組御番衆 被罷出候間 御番所江被仰付可被下候由 申來候儀も有之

一御本丸御金納拂有之節ハ 前方ニ御金奉行衆カ人足之員數 以手紙御城代迄申來候 口上ニ而返事済 右人數御城代 御定番之知行高ニ割付 此分人足出候様 御定番衆江御城代カ以手紙御金奉行衆之手紙も相添 觸遣之 人足拾五人迄者御城代カ出ル 拾六人カ御城代 御定番と三人之割合ニ成申候 桜御門人足出入之手形入申候付 御金日早朝三御番頭衆 今日御金運候人足御本丸江入候段 以手紙申達 手形之鑑札相添 以使者差越候 破損方役人壹人 上下三人中間小頭 人足万石連 桜御門江手形持參 鑑札被引合致出入候 罷帰候節鑑札手形共 右破損方役人請取 上屋敷江持參申候 御定番衆カ出候人之御断ハ勿論 御定番衆カ御番頭衆江被仰遣候 但納拂共ニ追手御多門迄御金奉行衆御出 御金運 御差引被成候 御金通り切り候内者 立番之足輕出し置 御番所出入之人を留申候

但御城代 御定番合候節者 人足不出候 又八月御番代之節茂 其日ニ當り候方ハ人足御除候事 御本丸江人足召連參候 破損役人之外 步行目付上下武人 人足之外多少ニ依テ添肩之人足二人三人外ニ出之

一每年御具足虫干有之節者 御具足奉行衆カ前方二人足之儀 以手紙申來候 御口上ニ而返事相済置 其日者頭壱人 上下四人 足輕小頭壱人 足輕武拾人 帳付壱人 中間小頭壱人 中間武拾人召連 御本丸江相越 御役所カ御差図次第虫干仕候 大方二三日置程三虫干仕廻候迄人之儀度ニ申來候 桜御門相通り候様子 御金納拂之時之格ニ而御座候 御定番衆カ之人者別格ニ出申候故 人足割合ニ者不仕候

一每年御鎧 長刀等掛申候節 御本丸カ追手多門まで運出シ候 右人足之儀 前方御弓奉行衆書付御持參 御断御座候付 至其日破損方役人壹人 上下三人 中間小頭武人 中間召連罷出 運せ申候 此時者太鼓櫓下御門 大御門 此兩所片扉開之 桜御門通り候儀 前ニ同

一御本丸ニ有之候 御墨印 長持 御奉書 長持 上屋鋪江御取寄之時 家老壱人 裏付上下着之上下四人 破損方役人三人 中間小頭壱人 長持運候 中間召連參候 桜御門之内御番頭衆之守力 番所ニ而請取之 大御番衆之内破損方役人 御出合御渡し被成候 右之長持 御本丸江納候時 茂同前 桜御門罷通候儀 右同

一追手方掃除場 御城内外ニ有之候 破損方役人 中間小頭并中間召連罷出 度ニ致掃除候一追手御堀之内江身なけ死人等有之節ハ 破損方之役人 早速取上ヶさせ置 町奉行江御使として右之役人參申達候 御奉行衆カ番人被仰付 追手近所芝生にさらし置申候 番人參候迄ハ此方之もの附置申候 人主有之候得者 町奉行所江人主御断申 夫ニ片付申候 御城カ取上ヶ候時水心有之下ニ又ハはしご繩など入候時 兼而其心得ニ而申付置候 但生候て有之者ハ衣類等被遣之

一大御番所 弁形張番所 太鼓櫓下 西丸仕切 此五ヶ所江著 帳前ニ外硯紙等遺置之

七ツ時迄勤申候 七ツ時より當番之者罷出請取 翌朝五ツ時迄致勤番候 番頭と給人同道 一同ニ代ル者頭ハ諸番所之足輕共召連 一同ニ代ル 但不斷諸番所番代之者共不残以札出入一所ニ御門不断ハ潛^{タマリ}計明置申候 每日御門明たて之儀 朝六ツ時已前上屋敷當番之家老壱人御寝間ニ有之候鑑取出シ大目付壱人同道 大御番所江罷越 番頭と三人立合三而明六ツ之太鼓打切追手一之御門之くゝり明させ 鑑ハ大番所ニ差置之 太鼓櫓下御門江は大番所より給人壱人 足輕ニ鑑為持參り御門下を鑑通シ遺之 者頭御門之くゝり明させ申候 鑑ハ大御番所江給人為持參差置之 西丸仕切ニ者大御番所より者頭壱人 鑑足輕ニ為持參 御門之くゝり明させ 鑑ハ為持帰 大御番所ニ差置候晚者 暮六ツ以前上屋敷方家老 大目付 大御番所江參 朝之通番頭立合暮六ツ之太鼓打切候而御門ベさせ申候 右同時太鼓櫓下御門者 其所ニ罷在候者頭御門ベさせ西丸仕切御門者 大御番所より者頭罷越 御門ベさせ申候 三ヶ所之鑑ハ家老 大目付 上屋敷江持参 大和守手前ニ差置之申候

一夜中江戸より次飛脚三而御奉書又ハ長崎奉行衆より御状箱等到来候得者 町奉行衆より御手紙被差添之 追手張番所迄被遣候 御状箱ちひさく候得者 一之門くゝらせ大番所罷在候番頭上屋敷江持參申候 御状箱かさ高ニ而通り不申候時ハ 町奉行衆之御手紙計番頭持參申候 御門之鑑 手前より家老請取 大目付同道 番頭も立合 夔形番所ニ泊り居候 給人兩人 是又出合 御門之鑑を明させ 御状箱通し 早速御門ベ 右之御状箱上屋敷江持參申候 此時番頭者大御番所ニ罷在上屋敷江も不參候 ケ様ニ夜中御門明候節 張番所ハ勿論 夔形御門下之番所 足輕番所 大番所之番人 右不残起居申候 御状箱 持候て町奉行衆へ御手紙之返事認 上屋敷當番之中小姓ニ為持 大番所迄遣之 町奉行衆之御丈渡シ越申候 勿論返事不相済内者使之者張番所ニ為待置申候

一御城内御普請之材木石等 物而御門潜ヲ通り兼候もの出入之時ハ 其役所／＼より御城代江御断有之付而當番之家老 大目付同道 大御番所江參 番頭与三人立合 一之御門 大御門ハ何茂片扉開之家老 大目付ハ上屋敷へ罷帰 右出入相済候以後又家老 大目付御門江相越 番頭立合御門ベさせ申候 且又太鼓櫓下西丸仕切御門ニケ様之儀有之節 太鼓櫓下御門江ハ大番所より給人壱人 足輕ニ鑑為持罷越 太鼓櫓下御門當番之者頭江相渡シ罷帰候 者頭御門片扉開かせ申候 鑑者太鼓櫓下御門ニ罷在候 給人 大番所へ持參申候 右出入相済候以後 者頭御門ベさせ申候 西丸仕切御門ハ大番所當番之者頭 鑑足輕ニ為持參 御門片扉開かせ罷帰 其以後又者頭參御門ベさせ申候

一御定番御番頭 御加番町奉行衆 御目付衆 御船手 境奉行衆 御番所御通り候節ハ 番人不残下座仕候 此外者下座無之

一追手舛形之内御両門江市日三町人共參候 是ハ毎年御番代以後 御番頭衆御吟味被成 何町誰^ト与名を可書付 此分者御番衆御用承ニ 市日御多門迄參候間 前ニ通出入有之様被成度之由 御城代江御番頭衆より御断御座候 市日三町人共參候得者 札なしに御門通シ申候

但大御番頭より參候御書付之写 張番所 舛形番所江出シ置之 其書付ニ引合 今日者誰ニ御多門

一右五ヶ所江大燈灯遣置之

一大御番御組頭衆并御番衆 御城江御出之時 其御組之御番頭ら先達而御切手被遣之 大御番所
へ差越 其以後御通り候

一大御番衆之内 御役人常と御門出入之儀 每年御番代之節 御番頭衆ら銘と御名御書付 御城
代江被遣 其御書付写 御番所江出し置候而 御在番中不及御切手御門出入

一御番頭 御加番 御目付衆 御家来 其主人之御名判札二而出入 大御番御組頭并御番衆御家来ハ
両御番頭御連判之札二而出入 或ハ御城内江入來候諸職人 其外在こら入來候掃除之者ハ其參
候先より迎送之札二而出入 何レ之御家来三而も日帰二不罷成所 惣而遠方江被遣候ものハ送迎
札二而出入 是ハ人数何人何月何日何方江送札二而罷出候と帳に記置 縱ハ其月不帰遅り帰候共
迎札二而入候節承届 右之帳面見合於相違者通し入ル 其節帳面三点かけ何月何日罷帰と書付
置候

一御番衆御小屋破損之節 職人御呼入候時 於御番所 是ハ山村与助方江被仰遣 与助申付 前ミ
カ御城中江入來候職人三而候哉 札持二相尋 職人二も与助申付入來候ものにて候哉と尋候而無
相違者町之名 其ものゝ名書留置通し申候

一上方御代官所カ毎年追手舛形之内 御多門二而上納銀有之候 其節ハ張番所 舛形御番所江御奉
行衆カ御断御座候 御代官衆之手代 其外御金二附參候もの共 右両御番所二而様子承届 人数
帳面記置之 納金埒明候以後 人数御城外江出し 帳面ニ点掛出申候 右之外御代官所などより
上納金在之時者 御城代江 御金奉行衆カ御断御座候 其趣當番之番頭申付 張番所 舛形番所江
相達 右之御金銀納ル 帳面ニ人数記置候儀 前と同納借金銀上納有之時分も此格也 但ケ様之
改り候儀有之時 致混亂難見分候故 別帳ニ仕置能御座候 送札二而出ルと書付置申候 此帳茂
別帳ニ而能候

一大御番衆江奉公人女古來カ入來候 是者不及御切手 迎札迄三而入候 誰様御組付様江振袖之女
留袖之女食燒とか下女とか 其品を帳面ニ記置 右之女送迎ニ而御出し候節 最前之帳面点掛
何月何日送札二而出ルと書付置申候 此帳も別帳ニ而能御座候

一大御番衆御知行所之者參候節 又ハ江戸 二条カ御親子 兄弟 祖父 伯父 哥舅 舅賀 孫婦
妹賀迄之御家來 飛脚として參候もの 御番頭之御切手ニ而迎送之札を以出入之 但飛脚之者
ハ 縱令親子之間カ來候共 一切御城内江入不申候

一大御番衆江御知行所カ之者 其外之年季被召抱 御城中江入候時 御番頭之切手ニ而迎札二而
入之

一御番衆江江戸御宿并御子息様カ參候飛脚者 不及御切手 迎送之札ニ而出入之 且又御家來何方
へ飛脚ニ被遣候ニも迎送之札計ニ而出入之 縱令御子息様ニ而茂他家江養子ニ御越被成候得者
其飛脚ハ御城内へ入不申候

一大御番衆御家來永ニ暇被遣 御城外へ出申ニハ 其御組之御番頭カ御切手ニ而送札を以出之御
番頭之御家來も同前 御切手是又御一判也

一大御番頭之与力同心 江戸カ登り 御城中江入候節 又は江戸へ下り候時も 不及御切手 迎送之

札三而出入之 不断ハ勿論出入之札を以通也

一 御番代り之節 御番頭 御加番衆江江戸御宿 又ハ御在所より御迎ニ參候もの十人迄ハ 不及御切手 拾壹人以上ハ御切手三而入申候 十人迄内ニても御切手被遣候得者 請取置申候而 迎札ニ而入ル也 御城中迄江戸御宿或ハ御在所江人被遣候時も 右之格也 惣而何れにても御切手參候ニも迎送之札無之候得者 御門通し不申候

一 御番頭衆 御加番衆 御目付衆御家來 病人御城外江御出し 町屋ニ被差置候時 駕籠か乗物ニ而罷出申ニ者 御切手入申候 おわれ出申候か 歩行ニ而出候病人者不及御切手候 若被遣候得者其通り候 為看病付罷出候ものには御切手入不申候

一 御番代之節 御番頭衆 御加番衆 大御番衆御家來 病人町屋ニ被差置 御代り以後御城中江入候時 十人迄者 不及御切手迎札ニ而入 御切手參候得者 其通候 拾人余者御切手ニ而迎札を以入也 御目付衆御代り之時 御家來病人 ケ様之儀有之候得者 右同前候

一 死骸御城外江出候時者 御切手參大番所江差越其以後通也 死骸ニ付罷出候人数ハ 出入之札を以通也 死骸駕籠か乗物ニ而出候得者 其断御切手ヘ載候筈也

一 御番頭衆 御加番衆 御目付衆馬おち候て御城外へ出候時者 札計ニ而馬持出ス人足出入
但御城代江以使者御断計ニ而馬ニ者手形も入不申候

一 伏見御本陣江為届諸町人參候門帳付差置之 但玄関江言通之用儀有之者ハ各別之事
是ハ本陣狭ク候故 右之通ニ而惣而伏見江ハ見廻使者多候付而 兼而其心得仕候事

大津泊江も使者見廻多有之事

一同所にて御船手迄御座船為迎被差登候付 御乗船 尤前方道中迄 其段御船手迄使者ニ而申來候事

一 御座船ニ付參候与力ニ者 船中ニ而料理振廻 惣水主には こわ飯酒肴為給候 与力江者大坂入代以後以丈者時服式被遣候事

是ハ大坂江御着以後 於彼地承合

一同所迄御座船ハ早ク候付 家中之面ニハ先江出船ニ而能候

一道中迄飛脚參候時者 御手前人ニ而候得者鳥目遣之候 町飛脚にて候得者不遣候事

道中覺書

一 銀式枚宛

御泊り之御宿江被下候

一 同壱枚宛

御屋休御宿江被下候

一所ニ船渡シ并川越等ニ者被下物無之

一 間屋同断

一 品川 河崎迄御一門様方迄御使者參候節ハ 其人ニより時服羽織 或銀式枚か壱枚か 金式百疋
か 御歩行丈ニ者百疋 足輕飛脚ニ者鑑毫貫文 中間ニ者鑑五百文被下候事

一 外之御方様迄之御使者ニ者被下候物無之候事

一同御進物者御受納被遊候事

一御代官衆ら來候進物者返シ候事

一宮之渡シにては船頭水主江こわ飯 酒被下候事

一京都江御立寄之節 所司代江御太刀馬代 黃金壱枚御持參候付而 兼而致支度 道中明候長持江

入候事

八月御番代

是ハ前日御材木奉行衆ら書付御持參候事

一各井御番衆小屋後之御櫓 如例御番代前二付 三橋右衛門九郎

一門奈物右衛門 来廿二日可有見分由候 雨降候者 廿三日可罷出之由候間 為御心得如此候以上

七月十八日 御城代
岡部丹波守様 御定番
菅沼主水様 但御月番を口二書也

一山里御櫓御多門 此外之御文言右同断

七月十八日 右御三人
小笠原土佐守様

一先登御加番土岐伊豫守様 道中草津ら飛脚到来 町奉行衆ら御状御届 此御状御報者 御着前當地町御宿迄御着前ニ被遣之 但餘日無之付而不被遣候事も有之

但御奉書御持參候由被仰遣之

一土岐伊豫守様御到着三付而為御案内張番所迄御使者来ル 御即答相済 追付此方らも御使者被遣之

一酒井石見守様 屋代越中守様 前田宮内様 段と御到着御届右同断

一二日御城内外之御加番衆 御城代江御寄合有之事

明二日五時過御城入 私宅三而出来合之料理參候様三御出待存候 尤御城内御加番衆江も申達候間 御出合御番所御交代之儀可被仰談候 以上

八月朔日 御壺人

土岐伊豫守様

酒井石見守様 但八朔御本丸御出仕三付下り

屋代越中守様 御加番江者不及御廻状候事

前田宮内様

一御城内之面と並町奉行江者八朔御出合被成候付 二日御出合之儀 御直被仰達候付而不及廻状候

是ハ御證文 土岐伊豫守様御持參付而也

明二日登御加番衆御合力米之御證文可相渡候間 五ツ時過如例御出可在之候 以上

八月朔日

御藏奉行殿

一御加番衆御小屋附御石火矢改并小屋為見分 二日御家來御城入三付而 前日御切手來ル御場所

江致仰付候事 但御加番御四人不殘右之通之事

一二日御定番 御番頭并御城内之御加番衆 町奉行衆 御目付衆御出合 土岐伊豫守様御持參之

御奉書御請有之

御奉書 徒是末八午年記之

一筆令啓候

公方様益御機嫌好被成御座候間 可被心易候 將又其許為御加番代松平遠江守 西尾隱岐守

堀長門守 井上筑後守被差遣候 可被相談候 恐惶謹言

七月十三日

四御老中

松平因幡守殿

安部摂津守殿

遠山主殿頭殿

小田切土佐守殿

覚

役高三万式千石

役高式万石

役高壹万石

役高壹万石

元禄三年

右四人為大坂御加番代被差遣候付 御合力米之儀 以畫面之高四ツ物成之積 當年与来年兩度半分宛手形取之相渡候様 御藏衆江可被申渡候 以上

七月十三日

相模印

山城印

豊後印

加賀印

松平因幡守殿

安部摂津守殿

遠山主殿頭殿

小田切土佐守殿

能勢出雲守殿

右之通程付紙横折三相調參候故 前方ら何万石と御名之所 月日明置 至其時書入申候
是者御本紙御列座三而御渡被遊候故 手間取不申ために候事

右御奉書御請

猶以御加番衆御合刀米之御證文 御職奉行衆江相渡之申候 以上

先月十三日之御奉書 松平遠江守今二日持參 拝見仕候 公方様益御勇健被成御座之旨 恐
悅奉存候 然者當地為御加番代 松平遠江守 西尾隱岐守 堀長門守 井上筑後守被差遣候間
万事相談可仕之由 奉得其意候 追々到着 今日於因幡守宅參会仕候 從明三日段々御番所
請取候筈御座候 當御城内無異 御番衆無空勤仕 町方迄相替儀無御座候 恐惶謹言

八月二日 四人

四御老中様

參人ニ御中

右之御請者御奉書之日付不相知候付而 日付書入候程明置 至其時書入申候 乍去先月
者計相調一行之字積致了簡明置候而調能候事

追而啓上仕候

公方様益御機嫌能被成御座 恐悦奉存候 然者松平遠江守江御懇之御傳言之通申被聞 忝奉存
候 各様弥御堅固御座候由 珍重奉存候 當地別条無御座 私共無異罷在候 猶奉期後音之時候
上所

八月二日 三人 但御傳言之御方承合
四人 二通之内出之

四御老中様

參人ニ御中

右御傳言者町奉行衆江無之儀有之付而 御状一通相調置可然候事

一筆啓上仕候

公方様益御機嫌好被成御座 乍恐目出度奉存候 然者當地為御加番代 松平遠江守 西尾隱岐
守 堀長門守 井上筑後守追々致到着 今日於因幡守宅參会仕候 從明三日段々御番所請取之
筈御座候 當御城内町方迄相替儀無御座候 猶奉期後音之時候 上所

八月二日 四人

牧備後守様

參人ニ御中

右之御狀者御文言相究候故 前方ニ調之候

一二日次飛脚相立候節 江戸ヲ參候奉書御請被遣候節者 御加番衆御持參之奉書御請ニ當御城内
無異 御番衆無恙と有之文言入候付 次飛脚ニ參候奉書御請二者除之 猶奉期後音之時候と留
申候 是ハ同日被遣候付而也

一登御番頭 江戸御屋鋪江御出 又者御状參御方様杉原半切ニ調之 御登候以後御逢被遊候節 為
御挨拶御前江差上ル

一御加番衆御出御状之儀 是又同前之事

一御組頭御番衆御出之儀者 御城入之為御届 御出之節御小屋江御使者被遣候時 御口上ニ書入
遣之候事

七月廿八日 御到着

松平遠江守様

為御案内張番所迄御使者來 尤御奉書御證文等御持參之儀 御口上ニ有之

右御返答相濟 従是茂先刻者御使者道中御無事御上着珍重存候 来月二日可得御意候由被仰進
候事

七月廿八日 御到着

井上筑後守様

為御案内張番所迄御使者來ル 右同断 但奉書御持參之儀無之

七月廿九日 朝御到着

西尾隱岐守様

右同断

八月朔日御到着

堀長門守様

右同断

七月晦日御到着也

一為八朔之御祝儀 登御加番衆 張御番所迄御使者來ル 従是も御返礼旁御使者被遣候事
以御使者山里丸御門之鍵三本御返進 土岐伊豫守様

去年御登之時分 右之鍵御請取之節 御家來ル此方之御使者迄請取手形相渡候付而
御使者三返ス

二日

一六ツ半時 御定番土佐守様御出 是ハ御請御判形被成候付而也

一御城内外御加番并御目付衆 両御番頭御出 何茂麻上下御着 御料理二汁五菜

一御藏奉行衆御出候付而 於大廣間御合力米之御證文御渡し被遊候 即刻御退出也

一御連状御判形相済 町奉行所江被遣候目録

覺

一御請

壱封又ハ壱通共但御覺書三而も入候時ハ壱封也

是ハ美濃紙三而折掛ニ包之上ニ御請と書之

一御老中江

壱通 是ハ御傳言之御礼故前ニ出之

一牧野備後守殿

壱通

是ハ次飛脚之度ニ相極り被遣之

一能勢出雲守殿

壱通

是ハ次飛脚之度ニ相極り被遣之

一宿次證文

壱通

外二

一御老中江

壹通 登御加番衆ろ

一牧野備後守殿江

壹通

以上

八月二日

右之通相調候

七日

茂同断

一三日京橋口ろ山里丸御番交替付而夜不明前極樂橋御目付德永平兵衛様御番所江御出被成候付而仕切御門平兵衛様御断次第明申候様ニ可被仰付之旨 土岐伊豫守様江二日之晚被仰遣之一御料理過何茂被仰合先下之御番頭御加番四人江為御暇乞御越被遊候此時御羽織也

一右之為御礼御使者來ル但家老中被參候時ハ御直答也

一土岐伊豫守様三日御交替三付而為御暇乞御出即刻從是為御禮御使者被遣之一伊豫守様ろ去秋中ろ八月一日迄參候御切手目錄三記之御返し被遊候事但御鏡札者御城外為御用御差置暮合御返し被遊候

以手紙令啓上候然者去秋ろ被遣候追手御番所御切手目錄之通為持進之候御鑑札者未御用も可有御座よ存先留置申候晚程返進可申候 以上

八月二日

土岐伊豫守様

一御切手目錄相認様

覚

御切手 巳八月六日ろ
午八月一日迄 八通

以上

八月二日

右御目錄者杉原半切ニ認之員數之所明置何枚と相知レ申候時書加申候事

三日

一京橋口御番交替

土岐伊豫守
松平遠江守

一御番代相濟為御厘遠江守様御出即刻為御礼御使者被遣之

明四日五日六日七日十二日追手玉造口ろ交替三付夜不明前德永平兵衛殿御番所江被罷出候間右五ヶ日斷次第仕切御門明申候様ニ可被仰付候且又明四日酒井石見守交替付而追手御門者六ツ打明之候得共西之丸迄者夜不明前石見守家來繰出候様仕度候仕切之御門者夜中三而も不苦候間拙者左右次第御明させ可被成候已上

八月二日

松平遠江守様

右者夜明候而御家來御くり出し候得者よほとの間御座候故如此被仰遣候哉之事

一京橋口御交替相済 遠山主殿頭様より御届之御使者來ル 御即答済 従是も御使者之序而
候得者 右之御挨拶も被仰遣候事

一山里御櫓御多門之鍵三本 遠江守様江以御使者被遣之

一遠江守様より追手御門江御出し被成候鑑札二枚來ル 御手紙并御報別条無之

一明四日御交替付 酒井石見守様御出 熨斗出之

即刻御使者被遣之

一追手御門御切手石見守様江御返し被遊候事

御手紙目録別条無之 前三記之

一井上筑後守様 四日追手より御交替付而 従是も御使者被遣之

御口上

明四日御交替以後 御小屋御取込三而可有御座候間 朝之料理於私宅進可申候而 御小屋
御見分以後御出侍入候

四日

一御番代ニ付而 御在所より時分を御考被遣候御口上書 是ハ三日之晚相調御前江上ル

御時分能候而 御番所迄御出可被成候

下條長兵衛様

拙者儀先刻より御番所ニ罷在候

徳永平兵衛様

未夜明候得共 酒井石見守家來

西之丸仕切御門迄繰出し候様ニ仕

松平遠江守様

度候而 兩仕切御門御明させ可被成候

一四日晚七ツ時分 井上筑後守様より御切手來ル 是者御小屋為請取 御家來御入被成
候御断 御口上三而来候故 御即答にて相済 但御證文可然ク

未夜明不申候得共 西之丸仕切之御門迄

酒井石見守様

但大御番所江御上り

候時熨斗出ル

右者御番所より御使者被仰遣之 尤前方より
此御口上奉書紙半切三調之置之

酒井石見守様御家來衆御城外江
出拂申候御家來衆御城中江御入

井上筑後守様

但大御番所へ御上り

候時熨斗出ル

右同断 調置之

右御交替相済 御目付衆御同道三而御屋敷江被入為筑後守様御小屋へ御入 早刻御出 御料理
出ル

御交替候日來ルも有堅紙目録

御太刀

一腰

御馬

一疋

干鯛

一籠

以上

御口上

昨日交替首尾好相済候 為御祝儀 目録之通致進上之候

右御即報結御状三而被遣之

御文言右之趣計 何茂期面上御礼可申述と調之

一右御返答以後 徒是も以御使者 先刻者何々

被遂御意亦存候 其節御返答者申入候得共 為御礼以使者申達候

一屋代越中守様 明五日御交替為御暇乞御出 煙斗出ル

即刻為御礼 徒是も御使者被遣之

一右御同人様江御在番中之御切手御返シ 鑑札ハ御城外江為御用及暮御返シ被遊候事 但あなた
ろ取ニ参候事も有

右御切手目録手紙等前記之

一玉造口ろ御番交替ニ付而

明五日ろ来ル七日迄 玉造口御門ろ御番交替付而 御目付衆不夜明前 玉造口江被相通
候間 岩岐坂御門断次第 早速被明候様ニ可被仰付候 以上

八月四日

是六四日御交替之日ろ御番御
勤被成候付而如此

井上筑後守様

一筑後守様ろ御交替之為御祝儀 御太刀 馬代 御肴一種來ル 御即報御礼使者前ニ有之

一水野周防守様ろ御連状到来 御披見御廻し被成候事

水野周防守殿ろ連状到来 遂披見廻申候如例

明五日可為到着候由申來候 則返書相認廻之申候 以上

八月四日

安部摂津守様

遠山主殿頭様

小田切土佐守様

右者御報無之事も有之

明五日水野周防守殿到着可在之由 只今飛札到来申候 御合力米之御證文持參可被申
候而明日御城入之案内有之候者 可申入候条 其節如例御出可有之候

先為御心得申達候 以上

八月四日

御藏奉行殿

御金奉行殿

御證文等計相調之

五日

玉造口御交替

西尾隱岐守
屋代越中守

水野周防守様御到着之為御案内 御使者張御番所迄來ル

右御城入 西御番頭小屋江御越 其以後御城代江御出被成候付而 下り御番頭より御門御断之御手紙來ル

以手紙致啓上候 然者水野周防守就到着 御城入之案内先達而申越候處 通シ遲成及延引 只今御城入候得共 如例人数別紙書付致進上候 御番所江被仰付可被下候 後刻同道仕可 得貴意候以上

八月五日

米津周防守
酒井右京亮

松平因幡守様

覺

別紙切紙三書之

以上

供之者拾人

水野周防守

右者御到着先達而 張番所迄為御案内御使者張番所迄來ル 御番頭より右之書付御城代江來り其以後御城入之答候得共 周防守様無程御城入被成候故 右之通御断延引候 前廉御番所江茂被仰置候故 無相違通し申候 其上御奉書御持參之駄家來共及見候付 通し申候と御返答有之一周防守様御出 御奉書御持參御證文も御持參被成候

下り御番頭御両人御同道麻上下也

但此節御定番御町奉行衆御出合無之

水野周防守殿到着 追付御城入可有之由候之間 只今如例御出可有之候 以上

八月五日

御金奉行殿

御藏奉行殿

右之御證文毎年相究有之候故 下書相調置不知所明置候而 御持參之時書入申候 此御證文早速御金御奉行衆江御渡し被成候付而 其時写してハ手間取申候付而也

一右御持參之奉書写之廻し申候

水野周防守殿今朝到着 奉書被致持參致拝見候處 公方様益御機嫌好被成御座 恽懃御

同意奉存候 御老中より傳言茂有之候 則奉書写廻申候 御合力米御證文二通參候間 御金御藏両奉行衆江相渡申候 以上

八月五日

安部撰津守様

遠山主殿頭様

小田切土佐守様

一西尾隱岐守様 今日玉造口より屋代越中守様と御入替被成候付而為御届御出 早速御使者被遣之御口上別條無之

一御同人より御交替為御祝儀以御使者

大高擅紙

御太刀 一腰

干鯛 一簞

御馬 一疋

以上

従是者御状三而御返答相済 自是も即刻為御礼御使者被遣 但御使者へ御状三而御礼被遣候儀馬代等も有之付而也

一前田宮内様より去秋中より被遣候御切手目録之通被遣之鑑札ハ為御用及暮御返し被遊候等文言前ニ有之

六日 玉造口御交替

堀長門守様
前田宮内様

一堀長門守様御交替以後 為御届御出 従是も御使者被遣之

一御同人より御交替為御祝儀以御使者

進上

御太刀 一腰

干鯛 一簞

御馬 一疋

以上

堀長門守

右御口上別条無之 従是者御状三而御即答有之

追付為御礼従是も御使者被遣之

一明七日御繼飛脚相立候付而御廻状

明七日如例次飛脚相立 従長崎之御用物 状箱も差下可申候間 料理參候様 五ツ之太鼓
御聞候而御寄合可被成候 以上

八月六日

安部撰津守様

遠山主殿頭様

小田切土佐守様

明七日繼飛脚相立申候付而五ツ時過何茂寄合申候 玉造口交替相濟申候ハヽ料理參候
様ニ御出合可被成候 以上

八月六日

下條長兵衛様

徳永平兵衛様

猶以酒井右京亮殿江者不申入候而 御參會之節 次飛脚相立候儀 御心得可被下候
以上

明七日江戸江次飛脚相立申候付而 何茂寄合申候間 料理參候様 五ツ時過カ御出合可被
成候 以上

八月六日

米津周防守様

明七日御交代以後 江戸江次飛脚相立申候付而 何茂寄合申候間 五ツ時過料理參候様ニ
御出待存候 以上

八月六日

水野周防守様 是ハ御旅宿江遣之

明七日江戸江次飛脚相立申候付而 何茂
寄合申候間 料理參候様ニ 五ツ時過カ御出合

可被成候 以上

八月六日

松平遠江守様

西尾隱岐守様

堀長門守様

井上筑後守様

明七日江戸江次飛脚相立申候間 御状被遣候ハヽ 小田切土州迄可被差越候 弥御無事
可為御勤仕 珍重存候 御加番代も今日迄首尾好相済申候 以上

八月六日

小濱民部様